

東大阪市とハイテク

澤田 平

東大阪市（旧布施市と隣接旧市町村）は大変広大な市域になっているが、零細企業と冷笑される小工場群が多いことでも有名である。小規模工場ではあるが、固有のハイテク技術を有する工場も多くあり、日本の最先端産業を支えている。今やその事実、東大阪市の伝統にさえなっている。

私は東大阪市の足代地区で診療所を開業し、50年近く診療を続けてきた。診療のかたわらに研究したのは、江戸時代の日本の科学技術である。

医療も科学技術ではあるが、その昔『死者を生き返らせる器械』が日本で6種類も完成・製作されていたことを知り、その器械の遺物を研究した。

『死んだ者が生き返る？』と人々は一笑に付してしまいが、その例として、溺死者や凍死者を含め、心肺停止したものを蘇生することは可能である。

この器械は、「エレキテル」あるいは「ガルハニスマシーネ」などと呼ばれ、平賀源内・佐久間象山・橋本宗吉・伊藤圭介らの研究によるものである。

これは現在のAEDと同じ原理で人を救う器械で、私は6台すべてを復元・実験し、蘇生効能を確認することができた。日本人は、蘭学→オランダ渡りの知識をたちまち高度のハイテク医療機材として吸収し、実現化してみせたのである。

我が国は世界有数の地震大国であるが、今のところ地震来襲を全く予知することができていない。地震予知を目的とした「日本地震学会」は東大・京大・北海道大・九州大など、いわゆる旧帝大に属する機関であったが、その学者たちは研究費として四千億円の国費を食い潰してきた。阪神大震災・東日本大震災・熊本地震などを一度として予知できず、つまりはまったくの無力であった。

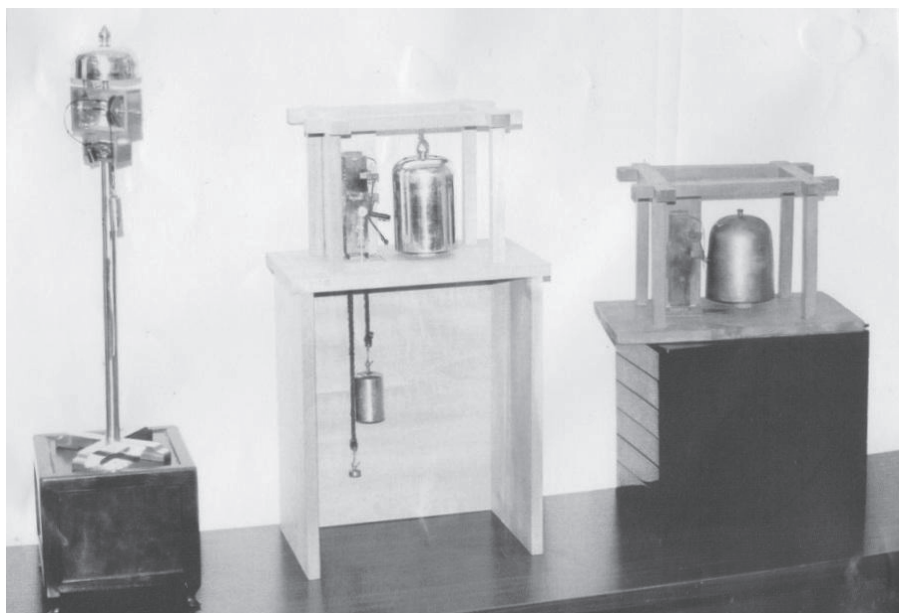
例句の果てに地震学会が出した結論は『地震は予知できない』とのことである。

二十一年間に食い荒らした四千億円の国費の巨額を思うと、予知技術が完成すると所属者が失職してしまうため、わざと開発を怠ったのでは？などという邪推してしまう。なぜかといえば、地震予知機は江戸時代に3機も開発され、そして機能していたからである。この予知機3機の原理は、地震発生の数時間前に電磁波の変化によって、一時的に磁力が衰退する自然現象を利用するというもので、佐久間象山や時計師らが、3種の地震予知機を、設計図を含め世に残している。地震予知機も電氣的理論に依るものである。

これらは我が国の電気工学の創始であるが、これほどまとまった研究は、東大阪市で長年診療を続けながら、苦心の研究を重ねてきた私のみの成果であると自

負している。

それは地震予知研究を目的として、国費を四千億円も食い荒らしながら、地震予知は不可能である、と逃げだした学者たちよりは優れた努力ではないだろうか。ここでも東大阪市の伝統が守られていたのである。

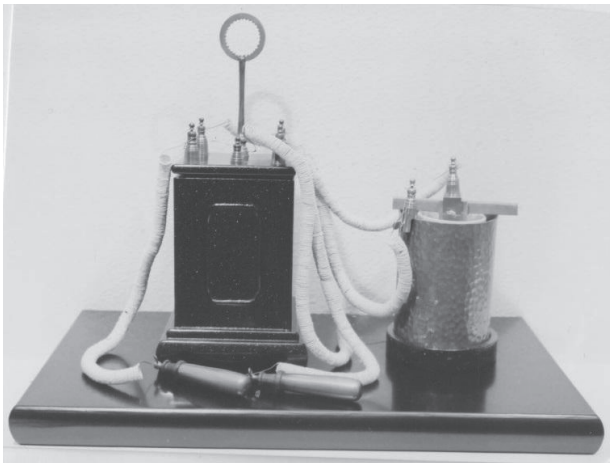
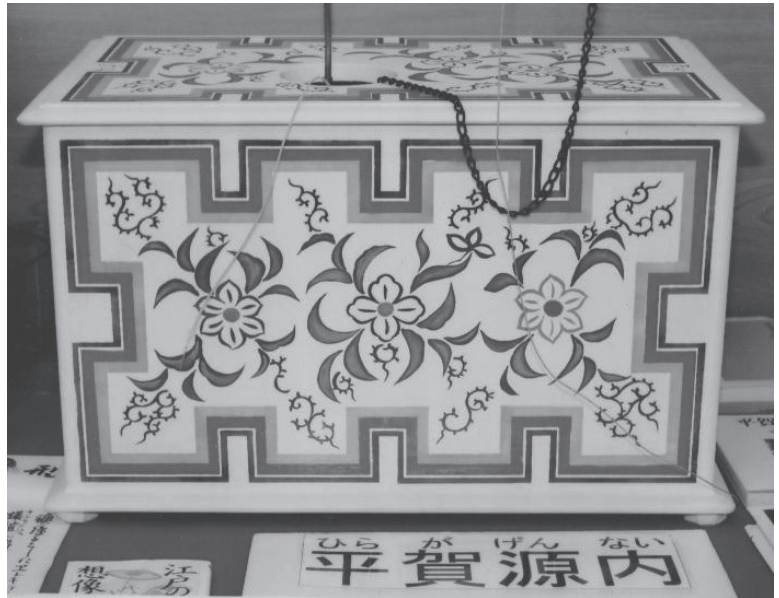


→和時計のカラクリを利用した

地震予知機

↓佐久間象山の
「電気治療器」を復元

→ 平賀源内作の「エレキテル」



「堺鉄砲研究会」
が復元したエレキテルの製作者ら

①平賀源内	(1728~1779年、博物学者)
②橋本宗吉	(1763~1836年、日本の電気学の祖)
③大野弁吉	(1801~1870年、金沢の発明王)
④伊藤圭介	(1803~1901年、名古屋の医師)
⑤佐久間象山	(1811~1864年、思想家)
⑥ファンデンブルック	(1814~1865年、オランダ商館の医師、 外国製品を国内に持ち込んだ)

→ エレキテル六種
(助手・下間正悟君と実演)

(猪飼野探訪会／堺鉄砲研究会)

